

教員活動状況報告書

提出日：令和 4 年 3 月 6 日
 所 属： 獣医学部 獣医学科
 氏 名： 齋藤 弥代子 職位： 准教授
 役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

以下の2点において特に責務を感じ、教育するようにしている。

- ・動物の視点で考え、行動できる獣医師を育てる。
- ・自身の専門分野である獣医神経病学（外科&内科）について
 ー社会に出ても、自分の力で知識と技能を発展させ続けることができる力を与える

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
先端獣医療	獣医学科	選択	6年	40
小動物病院実習	獣医学科	選択	6年	30
総合獣医学	獣医学科	必修	6年	140
獣医学特論 II	獣医学科	必修	6年	5
卒業論文	獣医学科	必修	6年	2
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5年	145
獣医外科学実習	獣医学科	必修	5年	145
小動物臨床実習	獣医学科	必修	5年	145
獣医学特論 I	獣医学科	必修	5年	5
獣医外科学	獣医学科	必修	4年	132
基礎小動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	4年	132

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。

卒業後も、自分の力で成長し続けることができる獣医師になってほしいため、答えを教えるというより、やり方を教えるよう心がけている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

教育の目的と目標

1と同様

アクティブラーニングについての取組

動画を作成し學理に掲載。それを予習／復習のみならず、アクティブラーニングとして授業（実習）中にも使用。具体的には、実習内容の解説の際に、學理にあげた動画を見せながらその活用方法を説明し、學理による予習を促し、数日後の実習時には、グループに別れ、携帯や iPad などその動画を見ながら、実践実習を行なっている。コロナ禍での新たな研究室活動としては、オンラインでの打ち合わせやゼミを多く持つようにした。2週に1回の卒論研究ゼミ、月1回の症例検討会・ミニレクチャーなど

ICT の教育への活用

上記と同様だが、臨床手技の動画を作成し、學理にあげ、それを予習／復習のみならず、授業（実習）中にも使用している。今年度はコロナの影響があったため、特に ICT の活用の場がさらに広がった。高木先生が開発された VR を、獣医外科学実習や小動物臨床実習にて活用したことは特出すべき点である。研究室学生と研修医への指導として、症例検討会と神経病に関わるセミナーを、オンラインや対面のハイブリッドなどの方式で開催。学外セミナーの動画配信を研修医や学生と3密を避けながら視聴など。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

①教育（授業，実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（B）

③学生の自学自習を促すための工夫（A）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科， M 学科の教員の方のみ記載してください。）

総合獣医学の授業に国家試験問題の解説を今までよりも多く盛り込んだ。しかし国家試験の問題を授業で行ってしまうと、自分で解いて点数を出すことができなくなるため、やめて欲しいという意見も聞いた。全体として、従来のような授業形態でも良いのかもしれない。

①～⑥共通

ハイブリッド授業だったため、対面の学生の数が少なく、学生たちの反応を見て理解を確認しながら授業をすることができた。学生の質問にも十分答えられたと思う。教員对学生比として好ましいと思われた。単に問題を解ける能力を身につけるだけでなく、解くための考える力を養えるような授業ができるように取り組んでいる。例えば、考え方のプロセスや勉強の仕方を、5年生の前期の授業から教えるようにしている。そしてその集大成として、総合獣医学においては、そのプロセスを使って問題を解くための解説をするように心がけて

いる。例えば、項目ごとに国家試験のために特に重要な内容を説明し、次にそれがどのような試験問題として出題されているかを示し、考え方のプロセスを駆使して一緒に問題を解いていく。そうすることにより、目前の問題が解けるようになるだけでなく、応用力が身につくのではないかと考えている。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

例年、予習復習をあまりしていないとの評価なので、事前学習や復習に活用するよう、動画教材を作成して學理にあげた。予習した結果をオンライン上で発表してもらった。

② ①の結果はどうでしたか。

全て分担教科なので不明。

予習してきたかどうか確認しながら実習を行った。例年よりも臨床手技ができる、すなわち予習してきた学生さんが多かった印象。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

分担教科と大学で決まっているため変えられない。

予習のための手技動画教材の學理への掲載は続けたい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

学業そのものが、学生の強いモチベーションとなると良い。授業に関しての取り組みは、⑥と同様。半期や1年間など短期の特待生制度を大学として検討する。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

指導した大学院生が、学会発表で2度目の学会賞を取得

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

大学の公務と重複しない限りは、ほとんど参加している。

ただ、多すぎるのもいかがかと思う。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

短期目標

- ・ 学生、院生、研修医に少しだけ上のレベルの課題を与え、成功体験を増やしてもらう。
- ・ 学内で、アジアの獣医神経病専門医コースのレジデントの受け入れ体制を整える。

長期目標

- ・ 学生、院生、研修医、教職員に良い意味のゆとりを与える。教職員は、学生たちに十分な教育ができるよう、まず自身の足元が固められるようにする。教員は現在多忙を極め、心身の調子を崩すリスクを負っていると感じる。注意が必要。教員としての仕事に専念できる仕組みづくりが必要。そのほうが効率的であり、そこからゆとりが生まれ、ひいては大学が発展する。
- ・ 出る杭を伸ばす。一そのためには前述通り「ゆとり」が必要。
- ・ アジアの獣医神経病専門医を一人でも多く育て、麻布大から輩出する。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。
シラバス、學理、小テスト、レポート課題、試験問題、教材、授業動画、セミナー動画、ICT
を利用している学生たちの写真、学会賞の表彰状、アジア獣医専門医の資格証

●FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施

有

該当を○で囲む

●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。